

日本は増大から縮小へという巨大な転換に直面している。明治初期に三三四万人程度であった人口は順調に増加してきたが、二〇一〇年代に一億二八〇〇万人に到達して以後は減少に移行し、都道府県単位では東京以外のすべての地域で減少になっている。経済指標のGDPも一九九〇年代以後は年度によって微増もあるが、ほぼ横這いで成長は停止している。

その結果、人口や経済の増加を前提に形成されてきた社会は経験のない事態に直面し、登場した現象の一例が代行というサービスの増加である。歴史があるのは運転代行サービスで、公共交通機関が発達していない地方都市で一九六〇年代から発生し、八〇年に飲酒運転についての罰則が厳格になって以後は急速に普及した。

最近では驚嘆するような代行事例が登場している。一例として就職早々の新入社員が退職代行サービスに依頼して退職の手続きをする事例が増加している。縮小社会と関係なさそうであるが、人口減少のため転職社員を採用する企業は豊富に存在し、退職手続きを代行する専門のサービスも存在するため安易な転職が加速されている。

墓参の代行を企業に依頼するなどは祖先への冒涇というのが一般の感覚であるが、墓参を代行する企業には年間一〇〇〇件弱の依頼があるとのことである。東京など巨大都市への人口集中や高齢人口の増大が影響し、遠方の墓地まで出掛けられないということが理由であるが、最近では墓仕舞いの代行の依頼も増加している。

以前から富裕な家庭では家事をする人間を雇用していたが、最近では共働きの家庭における家事代行が増加している。筆者は集合住宅に生活しているが、窓拭きが億劫になってきたので、代行サービスに依頼したところ、フィリピンの二人の女性が来訪して約一時間で見事に清掃してくれ、代行の価値を実感した。調査会社による家事代行サービスの市場規模の推計があるが、過去一〇年間で企業は九〇社から二〇〇社に、市場規模は一三〇億円から八一〇億円に増加し、さらに来年には二〇〇〇億円市場に成長するという推計を発表している調査会社もあり、代行社会は規模も業務も急速に拡大している現実が実感できる。

ここまで紹介してきた事例とは次元の相違する代行も着々と浸透している。生成AIがもたらす仕事の代行である。二〇一七年にアメリカとイギリスの二人の学者が発表した『いつ人工知能が人間の能力を凌駕するか?』という研究では、原稿執筆、原稿朗読、自動翻訳などは二〇二三年に人工知能が凌駕すると予測していた。

予測は見事に的中したただけではなく、二〇二〇年代後半と予測していたトラック運転、流行音楽作曲も実現している。二〇二三年には医師国家試験の問題を生成AIに回答させたところ合格の点数を上回った。またアメリカのSF雑誌に投稿される小説で生成AIが執筆した作品は毎月数百にもなっているという事実もある。

一九世紀初頭、自動織機の導入で失業する人々が機械を破壊する騒乱がイギリスで発生した。現状では生成AIを危惧する騒乱は発生していないが、人間の頭脳労働は着々と侵食されている。六〇年前、いざれ生涯労働時間は四万時間になるという予測が発表されたが、人間は機械を駆使して悠々と生活するか、機械に駆逐され失業するかの岐路に直面している。